

【2】華嚴五教章

刊2冊

(下巻末・墨書)

元和元年^卯月 日全部三帖求之了

准后義演

〔書名よみ〕 けごんごきょうしよう

〔写刊年次〕 慶長十七年(一六一二)

〔外題〕 ①五教章卷中(下) (墨書)

〔内題〕 ①華嚴一乘教分記卷中 ②華嚴經中一乘五教分齊義卷下

〔その他〕 〔尾題〕 ①華嚴一乘教分記卷中 ②華嚴經中一乘五教分齊義卷下

〔残欠状況〕 上中下三卷三冊のうち巻中下の二巻存 〔保存状況〕 小破

〔装訂〕 袋綴 〔丁数〕 ①(中巻) 四三、②(下巻) 六四丁 〔本文用字〕 漢字 〔二面行数〕 九行 〔二行字数〕 一七字 〔表紙〕 栗

皮無地 〔法量〕 縦二七・八×横二〇・一糎 〔料紙〕 楮紙 〔書入〕

あり。訓点(返点・送仮名)(墨)、句点・見出点・肩点(朱) 〔印記〕 ナシ 〔備考〕 上巻欠。

〔刊記〕

慶長十七年^{壬子}十月吉日

〔識語〕

(中巻・表紙)

塵紙売り出の時、松村氏ヨリ頂く 海浦観海

(中巻末・墨書)

元和元年^卯月 座主義演

〔解題〕

本書は、慶長十七年(一六一二)十月に刊行された古活字版の『華嚴五教章』全三冊のうち、巻中・下の二巻二冊である(上巻は欠)。

円覚寺本は、表紙の右下に、「三宝院」の墨書署名が確認できる。また各冊末に、醍醐第八十代座主で三宝院門跡、東寺長者も務めた准后義演による元和元年(一六一五、干支は乙卯)の識語がある。また義演のものと思われる付刺などの書入が本文に付されており、三宝院の復興を行った義演が関わった聖教の一書として大変貴重である。

『華嚴五教章』とは、唐の法蔵(六四三〜七一三)の著述である。法蔵は、唐代に華嚴宗を大成した学僧で華嚴宗の第三祖であり、賢首^{けんじゅ}大師、賢首菩薩、康蔵法師、香象大師、華嚴和尚と呼ばれ、国一法師の号を賜った。雲華寺の智儼から華嚴經の講義を受け、太原寺や雲華寺で華嚴經を講じた。また実又難陀が新華嚴經の翻訳をした時には筆受の訳を勤め、実又難陀・義浄らの翻訳に協力し、東西両京など五箇所に華嚴寺を創立するなど華嚴宗の発展に寄与した。

『五教章』の成立年は不詳で、古来より、①法蔵三十歳頃、②四十二歳、③四十二歳以後の説の三説があるが、凝念の『五教章通路記』を根拠として、三十歳頃の説が有力だと言われている。『五教章』は、華嚴一乗の教と義を述べ、三乗教に対して、根本法論である華嚴が勝れていることを顕示、別教一乗の華嚴の優秀性を論じて、同別二教・五教・十宗の教判を明確にしたもので、華嚴宗成立の根本書である。華嚴宗の教判である五教判に基づいて華嚴学の体系を組織し、華嚴学概論として重要な位置を占め、華嚴宗を代表する著書である。

『五教章』は、古くから書名の種々あることが知られ、『華嚴一乘教義分齊章』『華嚴一乘教分記』『華嚴經中一乘五教分齊義』『五教章』『一乘教分記』『華嚴經分記』『華嚴一乘分別記』などと呼ばれた。

『五教章』には奈良時代に将来された和本^①で、日本の華嚴学者が依用したものと、宋朝の注釈家が用い、鎌倉時代に日本に将来された宋本(唐本)の二種が知られるが、宋本の下巻が和本の中巻、和本の下巻が宋本の中巻と、中・下巻が顛倒している。日本では、戦乱によって逸せられたものを採り出して開版された宋本ではなく、古くから将来されていた和本を正確なものとして用いてきた。

活字は、『大正新脩大藏經』四五巻・四七七頁(No.1866)や、『出藏經』三四・一〇、『仏教大系』第一三(N.J.1591)などに載る。

『五教章』の内容は十章に分かれ、(1)一乗の意味と華嚴一乘独特の性格、(2)一乗三乗の教義と利益、(3)中国の十師の仏教観、(4)(5)華嚴宗の五教十宗の教判、(6)華嚴が本教であること、(7)その理由、(8)一乗三乗の相違点、(9)十玄門・六相、(10)心識・種性・修行など十門からの華嚴の最勝を述べる。仏教全体から華嚴経を体系的に位置づけたもので、華嚴教学の研究上で、『探玄記』と併せて重視される。

そのため注釈も多く著された。中国においては、道亭『義苑疏』一〇巻、観復『折薪記』五巻(現存せず)、師会^{しえ}『焚薪』二巻、師会『復古記』六巻(三巻)、希妣^{きてき}『評復古記』一巻、希妣『集成記』六巻や、朝鮮では、均如『釈華嚴經分記円通鈔』一〇巻などが著された。

日本でも、寿靈『指事』三巻、凝然『通路記』五二巻(三九巻分のみ存)、審乗『問答抄』一五巻、湛睿『纂釈』四〇巻、聖憲『聴抄』五巻、聖詮『深意鈔』一〇巻、喜海『名目』三巻、靈波『見聞鈔』八巻、実英『不審』二〇巻、観心『冠註』一〇巻、鳳潭『匡真鈔』一〇巻、普寂『衍秘鈔』五巻、普寂『懸鈔』五巻、戒定『帳秘録』五巻などが著された。

この他にも数多くの註疏が写本で残されており、日本における『五教章』

の重要性や『五教章』研究の盛んであったことが知られるのである。

『五教章』は版行が重ねられ、『仏書解説大辞典』には以下の写本・版本の所在を記す。これによれば五種の版本が確認できる。

〈写本〉

- ・正応三年写……大谷大学蔵本(余甲・六二)
- ・弘化四年写……大谷大学蔵本(余大・四二七六)

〈版本〉

- ・慶長十八年刊……大谷大学蔵本(長保・九九)
- ・慶安四年刊……高野山大学蔵本(寄・一・一六)
- ・宝永四年刊……大谷大学蔵本(余大・二二五九)、
龍谷大学蔵本(二六三一・一六一二〇)
- ・宝曆七年刊……龍谷大学蔵本(研仏)
- ・無刊記……宝亀院本

円覚寺蔵本は、「慶長十七年」の刊記があるため、この『仏書解説大辞典』で紹介された版本のいずれにも該当しない。刊記には、書肆名は記されないが、年記を手がかりにさらに調べると、慶長十七年(二六一二)の一条清和院版の古活字本であることが判明した。

「一条清和院版」とは、京都一条清和院(真言宗智山派)が開版した仏典のことを指し、具体的には慶長十六年(二六一二)「京一条清和院新刊」の刊記を持つ『俱舎論頌疏』のことをいう^②。この『俱舎論頌疏』は大変品格のある大本で、上質の楮紙に真新しい大型活字を用いて摺られた古活字版である。この大型活字は慶長十七年に『華嚴五教章』を刊行する際にも用いられ、版式も全く同じく作られた。そのため慶長十七年の『華嚴五教章』もこの一条清和院版と考えられている。

『華嚴五教章』の慶長十七年古活字版は、『江戸時代初期出版年表』

に、以下の五本の伝本が紹介されている。

◎華嚴五教章（華嚴一乗教分記）

三卷三冊

〔著者〕（唐）法藏著

〔刊記〕慶長十七年_{壬子}十月吉日

〔所蔵〕

・大谷大（長保九九）

・天理（一八八・二一イ一三）

・叡山（『古活字版の研究』図版八三）³

・駒大（三四四・三一二五）

・学習院反町（No.13の内）

円覚寺本はこの情報と一致し、川瀬一馬『古活字版の研究』の図版とも一致することから、円覚寺本は一条清和院版の一本と判断される。円覚寺本はこれまで全く知られていなかった伝本で、本調査で新たに発見された貴重な伝本である。

以上のように、円覚寺本は一条清和院本の伝本の一つとしての重要性が認められるが、さらに特筆すべき点は、表紙に記された「三宝院」の旧蔵署名と、准后義演の自筆の識語、及び恐らく義演のものと思われる訓点などの書入があることである。

表紙に署名された「三宝院」とは、京都市伏見区醍醐東大路町にある真言宗醍醐派総本山醍醐寺の主院であり、醍醐五門跡の一つである。永久三年（一一一五）に、左大臣源俊房の子で醍醐寺第十四世の勝覚が創建した。はじめ灌頂院と称したが、定賢・義範・義範の三師の法流を一身に集めた勝覚が醍醐寺法門の興隆を念じ、三法にちなんで三宝院と改めたという。創建当時は下醍醐寺西大門内側の無量光院に対して位置し、本堂・礼堂・寢殿・護摩堂以下の諸堂があった。康治二年（一一四三）には鳥羽上

皇の御願所となる。

鎌倉時代に入ると度々火災にあい、第七世成賢、第十一世憲深らが復興への努力を重ねた（解題1参照）。第二十一世の賢俊は、南北朝内乱の中で足利尊氏の帰依を受け、三宝院を興隆した。第二十五世満済は足利義満の猶子となり、応永三年（一三九六）には醍醐寺座主に任ぜられ、准三后に列した。この頃から三宝院の院主は醍醐寺座主となるなど、醍醐寺山内でも重んじられた。

応仁の乱により荒廃・焼失した三宝院を復興したのは、安土桃山時代に活躍した義演である。義演に帰依した豊臣秀吉は度々醍醐寺に赴き、慶長三年（一五九八）には盛大な観桜の宴「醍醐の花見」を催行した。その際に数々の伽藍を改修整備し、義演は最初に復興した金剛輪院の名を由緒ある三宝院に改め、第三十二世三宝院の院主となった。なお現在の堂宇は慶長年間（一五九六〜一六一五）に豊臣秀吉が再建したもので、表書院と唐門は国宝、庭園は国特別史跡・特別名勝に指定されている。

また醍醐寺は早くから修験の拠点であったが、室町時代に入って天台宗系の本山派に対する真言系修験の中心となり、江戸時代には修験道の根本道場となった。三宝院は、真言宗系の山伏の組織を従えていたが、慶長十八年（一六一三）に徳川幕府から修験道当山派の本山に定められてからは、本山派の聖護院とともに修験道を二分するようになったという。

なお円覚寺所蔵本の中には、本書の他にも「三宝院」の署名や旧蔵印を有するものがある。例えば、『接鮮瘡語』（観海2）には「醍醐三宝院」の墨書と「三宝院蔵」の朱印があり、『遍照發揮性靈集』（金比羅堂1）には「三宝院事務庁」の朱印が押されている。

話を戻して、『五教章』の識語に記される「准后義演」は三宝院の門跡を務め、醍醐寺第八十代座主となった人物である。准后とは、太皇太后、皇太后、皇后の三后（三宮）に准ずる待遇を与えられた者の称で、准三宮ともいう。貞観十三年（八七二）清和天皇の外祖父藤原良房を初

例とし、皇族、女御の他、摂政、関白、大臣らに与えられた。廷臣では、北畠親房などの数例を除けば、ほぼ摂関に限られた。義演はその准后を天正十三年（一五八五）、二十八歳の時に受けている。

義演（一五五八〜一六二六）は、安土桃山から江戸初期の真言宗の僧で、醍醐寺第八十代座主、中興の祖と仰がれている。永禄元年（一五五八）八月二十日に、二条押小路の邸に生まれ、父は関白二条晴良、母は伏見宮貞敦親王の女位子で、幼い時に將軍足利義昭の猶子となる。莊嚴院義堯（九条政基の子）の付弟となり、永禄十二年（一五六九）六月に入室すると直ちに上醍醐に上り、天正三年（一五七五）まで住山した。義堯の死後、理性院堯助の室に入り、元龜二年（一五七二）四月、十四歳の時に報恩院雅嚴を戒師として得度した。天正十四年十二月雅嚴より伝法灌頂を授けられ、同十九年二月に至り雅嚴より付法状を受けた。その間、天正三年（一五七五）に金剛輪院を再興、翌天正四年（一五七六）に大伝法院（根来寺）座主となる。ついで醍醐寺座主となり、天正七年（一五七九）に大僧正、天正十三年（一五八五）准三宮（准后）の宣下を蒙った。天正十六年三月、聚楽第行幸に際して仙洞にて仏眼大法を修し、文禄元年（一五九二）六月には、豊臣秀吉の朝鮮出兵のため東寺講堂にて仁王經大法を修した。文禄三年七月に東寺長者に補任され、慶長三年（一五九八）八月には方広寺の大仏開眼供養で呪願師を務める。元和九年（一六二三）正月には戦国時代以来中絶していた後七日御修法の再興を実現するなど、醍醐寺の復興に尽力し、寛永三年（一六二六）閏四月二十一日に六十九歳で亡くなった。

義演は、当時の五摂家当主の内、三人が兄弟という血筋の良さに加えて、豊臣秀吉・秀頼の厚い帰依を受けた。准三宮宣下も、宣下の前日に実兄の二条昭実が関白を辞し、そのかわりに豊臣秀吉が関白になったのだという。この事件は貴族社会に大きな衝撃を与えたが、義演と秀吉との間で政治的な取引があったとされている。義演と秀吉との間柄は特別

に親密で、秀吉が亡くなる直前の慶長三年（一五九八）の醍醐の花見の催行もその一例である。義演が醍醐寺の復興に大きな業績を残せた理由には、秀吉の外護に依るところが非常に多い。

義演はまた、醍醐寺伝来の彪大な聖教を書写整理したり、研究・書写するなど、醍醐寺教学の復興に尽力した。三宝院経蔵の充実を図るために、貴重な書籍を見つけるとは筆写させ収集した。法然伝の一級資料と評される『法然上人伝記』（醍醐寺本）は、法然に近侍した源智が書き記したものを、義演が江戸時代初期に書写させたもので、大正六年（一九一七）に醍醐寺三宝院の宝蔵から発見された。また寺史の編纂にも力を尽くし、約二十年を費やして醍醐寺の寺誌『醍醐寺新要録』全二十二巻を完成させた。ほかにも、『義演准后日記』六二巻、『五八代記』三巻、『後七日御修法再興記』一卷などの著作がある。

円覚寺本『五教章』は、この義演が元和元年（一六一五）に「全部三帖」を求めて入手したと記すものである。この識語によれば、もと三帖（三冊）揃いであったとわかるが、現在のところ、上巻は確認できていない。円覚寺観海が三冊揃いで入手したのかどうかは不明である。

表紙の墨書によれば、義演が揃えた慶長十七年古活字版『五教章』三冊を、観海は、塵紙売り出しの際に、松村氏からいただいたとのことである。松村氏は不詳で、醍醐寺三宝院の関係者であるのか、津軽の人物であるのか判然としない。

観海は、円覚寺第二十六世義観の長男で、はじめ智観で、のちに観海と改めた。明治十二年（一八七九）四月六日、義観二十四歳の時に生まれるが、大正五年（一九一六）十一月十三日に三十七歳で亡くなった。父義観が六十一歳の時で、『神変』には追悼の詩歌が載っている。

観海関係聖教から、観海と醍醐寺の関係を探すと、『柴燈護摩供次第』の奥書に「明治参拾五年四月初旬仏歡喜日／京都府宇治郡醍醐三宝院道場ニ於テ書写畢」、「真言名目玄談」の奥書に「此書醍醐寺留学之際教師

山田憲隆師ヨリ借用書写セシ者也／明治卅四年十二月仏歡喜日／仏子海浦觀海写」と見えるなど、明治三十四年～三十五年あたりに三宝院にて修学し、諸書を書写・入手していることが確認できる。

以上、円覚寺蔵『華嚴五教章』の特徴と意義について述べてきた。本書はこれまでその存在が知られていなかった慶長十七年刊、一条清和院版古活字本の一本であり、さらに元和元年に醍醐寺第八十代座主准后義演が収集して三宝院の宝蔵に収めた本で、その旨を記す義演自筆の識語が記された、そして恐らく義演が句点や付訓等の書入を記した、極めて貴重な伝本なのである。

〔注〕

(1) 奈良時代の将来には二説ある。第一は、聖武天皇の天平八年(七三五)に、北宗禪の普寂の弟子である唐の道璿が初めて華嚴の章疏を伝えたといい、第二は、天平年中に審祥しんじやうが将来したものとする説である。審祥は、奈良時代の華嚴宗の学僧。生没年は未詳。審祥とも。入唐して法蔵に華嚴を学び、天平年間(七二九～七四九)に帰国し、大安寺に住した。良弁からの勅請により、天平十二年に、東大寺法華堂の前身である金鐘寺にて『華嚴経』を講じた。これが日本における『華嚴経』の講説の最初とされる。審祥将来説については、審祥が新羅出身僧か否かという問題もあり、検討が必要とされている。鎌倉時代の久米田寺聖憲は、叡山前唐院の経蔵に法蔵の真筆本があると伝えるが現存せず真偽不明である。他に、鎌田茂雄氏は、『大蔵経全解説大辞典』(1968 華嚴一乗教義分齊章)の解説に最澄の将来と記す。将来の時期には諸説あるが、和本に基づいた最初の注釈書が東大寺寿靈の『五教章指事』であることから、奈良時代には将来されていたと判断されている。

(2) 一条清和院版『俱舍論頌疏』(大東急記念文庫蔵)の図版は、『日本古典籍書誌学辞典』(一条清和院版)の項に確認できる。

(3) 慶長十七年刊の『華嚴五教章』(一条清和院版、叡山本)は、川瀬一馬『増補古活字版の研究 下巻』(一九六七年)の図版八三(三九頁)に、下巻・刊記の頁が確認できる。

〔参考〕

- ・鎌田茂雄『華嚴五教章』(仏典講座二八、大蔵出版、一九七九年)
 - ・小野玄妙『仏書解説大辞典』(大東出版社、一九三三年)
 - ・『綜合仏教大辞典』(法蔵館、一九八七年)
 - ・『大蔵経全解説大事典』(雄山閣出版、一九九八年)
 - ・井上宗雄他『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店、一九九九年)
 - ・岡雅彦他『江戸時代初期出版年表(天平19年～明暦4年)』(勉誠出版、二〇一二年)
 - ・藤井雅子『中世醍醐寺と真言密教』(勉誠出版、二〇〇八年)
 - ・海浦由羽子『験乗末資海浦義観』(深浦町教育委員会、二〇〇三年)
- (渡辺 麻里子)





華嚴一乘教分記卷中
 義理分齊第九有四門
 一性同異義一
 十玄緣起無礙法三
 三性同異義第一
 六義為目緣起二
 六相圓融義四
 一性同異說有二門先別明後摠說別中亦
 二先直說後決擇前中三性各有二義真中
 二者一不變義二隨緣義依他二義者一似
 有義二無義義所執二義者一情有義二理

法藏 撰

海浦觀音
 之卷

塵依愛り出の時
 相封氏より頂く
 海浦觀音
 之卷

無義由真不變依他無性所執理無由此三
義故三性一際同無異也此即不壞末而常
本也經云眾生即涅槃不更滅也又約真如
隨緣依他似有所執情有由此三義亦無異
也此即不動本而常末也經云法身派轉五
道名眾生故也即由此三義與前三義是不
二門也是故真該妄末妄徹真源性相通融
無障無礙問依他似有等豈同所執是情有
耶答由二義故故無異也一以彼所執執似

為實故無異法二若離所執似無起故真中
隨緣當知亦爾以無所執無隨緣故問如何
三性各有二義不相違耶答以此二義無異
性故何者無異且如圓成雖復隨緣成染淨
而恒不失自性清淨只由不失自性清淨故
能隨緣成染淨也猶如明鏡現於染淨雖現
染淨而恒不失鏡之明淨只由不失鏡明淨
故方能現於染淨之相以現染淨知鏡明淨
以鏡明淨知現染淨是故二義唯是一性雖

緣不得有故是斷也若失緣法而有舍者無
緣有故是常也又惣即一舍別即諸緣同即
互不相違異即諸緣各別成即諸緣辨果壞
即各住自法乃為頌曰一即具多名惣相多
即非一是別相多類自同成於惣各體別異
顯於同一多緣起理妙成壞住自法常不作
唯智境界非事識以此方便會一乘

華嚴一乘教分記卷中

元初九日

月

元初九日

月

元初九日

九卷

五教分齊義卷下
元初五年 月
金針三后水
九卷

華嚴經中一乘五教分齊義卷下 法藏撰
第十諸教所詮差別者略舉十門義差別故
顯彼能詮差別非一餘如別說
一所依心識 二明佛種性 三行位分齊
四修行時分 五修行之身 六斷惑分齊
七二乘迴心 八佛果義相 九攝化境界
十佛身開合
第一心識差別者如小乘論但有六識義分
心意識如小論說於阿賴耶識但得其名如

華嚴經中一乘五教分齊義卷下
金針三后水
九卷

合各生身自受用與法身合名法身如佛地
論說此約始教說三自性法身應化法身如
本業經說此約終教說或立三身佛如常說
此通始終二教說或立四佛此有三種一於
三身中受用身內分自他二身故有四如佛
地論說此約始教二於三身外別立自性身
為明法身是恒沙功德法故是故梁攝論云
自性身與法身作依止故三亦於報身內福
智分二故有四如楞伽經云一應化佛二切
德佛三智慧佛四如佛此約終教說或立
十佛以顯無盡如離世間品說此約一乘圓
教說
華嚴經中一乘五教分齊義卷下
慶長十七年壬子十月吉日